

アメリカ人の物語 I

歴史とは、すなわち人間である。

なぜアメリカは超大国になれたのか。

ここに本当のアメリカ史がある。

アメリカ人の魂がある。

史実に基づく物語。

目次

第一章 ワシントン家の人々

第二章 若き日のワシントン

第三章 新世界の覇権

第四章 大農園主ワシントン

第五章 独立戦争へ至る道

著者プロフィール・連絡先

第一章 ワシントン家の人々

物語の舞台



ポカホンタスとジョン・スミスの時代から100年以上後の物語。

主人公はワシントン。ワシントンは誰でも知っている人物であるのにも拘らず、その人生

はアメリカ人以外にあまり知られていない。

私は敢えてここで問う。

ジョージ・ワシントン、史上初の大統領になった男。彼はどのような人物であったのか。

何を思っていたのか。考えていたのか。悩んでいたのか。どう行動したのか。そして、どのようにして独立戦争を勝ち抜いたのか。さらに独立戦争後にどのように国家の基礎を作ったのか。

ワシントンを通じて時代を見ることで建国期のアメリカの実像が浮かび上がる。アメリカ人の生き様が分かる。理想に燃える美しい一面と利権を奪い合って争う現実的で醜い一面。それは昔も今も変わらない。

そういった点をあなたに伝えたいと思って私は筆を執る。

そして、あなたにも改めて考えて欲しい。アメリカがどのような国家であり、指導者には何が求められるかを。

まずワシントンの知られざる少年時代を追いながら植民地時代のアメリカを描く。

移ろわざる灰青

ささやかではあるが、歴史がジョージ・ワシントンの名前を初めて記したのは、ワシントン家に代々伝わる聖書である。古びた聖書に流麗な字体で次のように書かれている。

「ジョージ・ワシントンは、1731/32年2月11日朝10時頃にオーガステインとその妻メアリの息子として生まれ、4月5日、教父のベヴァリー・ホワイティング氏とクリストファー・ブルックス大尉、そして、教母のミルドレッド・グレゴリーの導きで洗礼を受けた」



新生児は体重がかなりあったことを除け

ば、とりたてて変わった点はなかった。灰色がかつた青い瞳は、この世で初めて見た太陽の光に戸惑っているかのようだ。後に成人となつたこの赤児の肖像画を描いた画家は、その瞳の古色蒼然とした色合いを「数百年経つてようやく明るい色に移ろう」と表現している。まだ満足に生え揃わない髪の色は榛色だった。

ワシントンの生誕地は、ヴァージニア植民地ウエストモーランド郡ボープズ・クリーク

（現ウエイクフィールド）である。海岸地帯の一角にあるノーザン・ネック地方に属する。

新生児を迎えた小さな家屋は、ポトマック川の西岸にあつて、対岸のメリーランドを遙かに見渡せる。塩性湿原が広がり、木立がそこかしこに千切れ雲のように散っている。何の変哲もないヴァージニアの風景だ。

ワシントンが生まれた頃のアメリカは、その後の激動がまったく予想できない程、平穏な時代であつた。北アメリカ植民地の中でもヴァージニアは黄金期を迎えている。人口は実に12万人に達し、海岸地帯では、ジョン・スミスが体験したような草創期における困難は既に遠い昔の話になっている。

ただ西方に聳えるアパラチア山系の向こう側には、白人がまだほとんど分け入っていない土地が広がっている。ウィリアム・バードが「我が国『ヴァージニア』は入植が始まって以来130年以上経つが、我々はまだアパラチア山系のこちら側しかほとんど知らない。それは海から僅か250マイル〔約400キロメートル〕しか隔たっていないのだ」と書いたのは、ワシントンが生まれる少し前のことである。

銀のスプーン

ワシントン家は、1656年にヴァージニアに漂着したジョン・ワシントンに始まる。ジョンは、ワシントンから見て曾祖父にあたる。農園主の娘と結婚して社会の階梯を登り、ヴァージニアの上流階層に食い込むことに成功する。

ワシントンの父の名をオーガステインという。分かっていることはあまり多くない。なぜならワシントン自身が父についてほとんど言及していないからだ。それでもある程度度ことは分かっている。

オーガステインはイギリスで教育を受けた後、ヴァージニアに戻って成人する。その時、既に父親が亡くなっていたので、1,700エーカー(約700ヘクタール)の土地を相続する。そして、1715年に最初の妻と結婚する。結婚相手は農園主の娘である。

オーガステインを突き動かしたのは野心心である。ワシントン家の人々は代々、清教徒革命で落魄して国を追われたという記憶を受け継いでいる。家運を隆盛させることがオーガステインの何よりの目標だ。着実に富を築こうとオーガステインは土地の購入を続ける。

当時のことわざに「王はあなたを貴族に叙することができが、あなたを紳士にすることができるのは神と土地のみである」とある。土地が最も価値ある財産であり、尊敬を集める手段であり、権力の源泉である。未開の土地を安く購入して高く売る。それは土地投機と呼ばれる。ヴァージニアの農園主は、常に抜け目なく土地投機に目を光らせていた。

オーガステインは、土地投機の他にも鑄鉄所の経営に携わる。つまり、鉦工業に勤しんで

いた。実はそれは植民地では珍しいことだ。なぜなら従来、本国は植民地が製造業を営むことを歓迎していなかったからである。

本国には一貫した植民地経営の方針がある。植民地はあくまで原料の供給地であり、本国が輸出する製品を購入する市場となるべきであって、自ら製品を生産するべきではない。しかし、鑄鉄業に関しては特別な事情があった。

その当時、イギリスはスウェーデンと鑄鉄業で競合していて、自国の植民地でも鑄鉄の生産を奨励していた。オーガステインが手を付けた土地でたまたま鉄鉦石が見つかったので、鑄鉄所が開設されたというわけだ。

鑄鉄所の開設には多額の費用が必要となる。したがって、共同事業者の協力が不可欠である。1729年、オーガステインはイギリスに渡って共同事業者と交渉を行う。そして、帰国してみると妻が亡くなっていたことを知る。

それから間もなくしてオーガステインは再婚する。相手はメアリ・ボール。彼女が最初の子供としてワシントンを産むことになる。伝承によれば、オーガステインとメアリはイギリスで出会ったという。

親戚の家を訪れていたメアリが窓辺で編み物をしている時、外で1人の男が暴れ馬と格闘しているのを見た。男は馬から振り落とされて怪我を負い、近くの家運び込まれる。メアリは男を健康になるまで献身的に看護したという。

2人はともにヴァージニア人であること、そして、互いに近所に住んでいることを知って

喜ぶ。この時の縁がきっかけで男、つまり、オーガステインとメアリは結婚する。ロマンのある話だが、真実の程は分からない。

オーガステインには、初婚と再婚を含めて10人の子供がいる。当時のヴァージニアでは、どの家庭でも子供の数は多い。

例えば同じヴァージニア生まれであるトマス・ジェファソンの兄弟も10人であり、ジェームズ・マディソンに至っては12人兄弟である。このように多産であったために、ヴァージニア植民地の人口は1730年代から1760年代にかけて約3倍に増えている。

オーガステインは体躯に優れていた。2人の男の力でようやく持ち上がる荷馬車を1人で持ち上げたと伝わっている。ワシントンによれば、オーガステインは「背が高く、優れた均整のとれた体躯を持ち、子供が好きだった」という。

そうした優れた身体的特徴は、息子のワシントンにも受け継がれている。オーガステインを知る者は、後に成長した息子を見て、親子が非常に似ていたと述べている。身長も6フィート(約183センチメートル)を超えていたらしい。ワシントンの体格はオーガステインの遺伝によるものだろう。

ワシントンが3歳になった頃、一家はポープズ・クリークからポトマック川をさらに60マイル(約97キロメートル)遡ったエプスワッソンに移る。ワシントン一家が移った家は、蛇行するポトマック川を遙か遠くまで望める丘の上にあった。

屋内は、中央の廊下によって4つの部屋に分けられ、4つの暖炉が設けられている。2階には小さな寝室が幾つもあり、ワシントンの後に生まれた子供達を収容した。現代の基準で見れば小さな家に見えるが、当時の基準では恵まれた住宅環境だ。

エプスワッソンで生活を始めた家族は5人である。父、母、ワシントン、そして、妹と弟。ワシントンには年上の異母兄弟が全部で4人いたが、2人は早逝し、残る2人は本国に遊学してここにはいない。

1735年、鑄鉄所の経営に問題が起きる。これまで管理に携わっていた鍛冶師が亡くなったので、鑄鉄所をこれからどうするのか見直さなければならない。鑄鉄の生産を継続できるだけの鉄鉱石をこれから確保できるかどうか分からない。事業を継続すべきか、それとも廃業するべきか。たとえ継続するにしても、十分に経験豊富な鍛冶師を雇えるのか。そして、鑄鉄の品質を維持できるのか。

そうした問題の答えを求めて、オーガステインは再び本国に渡る。共同事業者と相談するためである。

夏に帰って来た時、オーガステインの手には前よりも有利な条件の契約書が握られていた。ただそれは鑄鉄所から上がる利潤の取り分が増えるだけではなく、仕事も増えることを意味している。

エプスワッソンから鑄鉄所までの距離は30マイル(約48キロメートル)もある。所有する農園を管理する傍ら、鑄鉄所を監督するには少し遠い。

1738年4月21日、オーガステインは、『ヴァージニア・ガゼット紙』に掲載されている広告に興味を抱く。それは、ラパハノック川の畔にある260エーカー(約110ヘクタール)の地所が売りに出されているという広告である。そこから鑄鉄所は近く、さらにフレデリックスバーグにも簡単に行ける距離なので子供達を学校に通わせるにも便利である。オーガステインは、その地所を購入して家族を連れて転居する。

小高い丘の上に建つ新居は、2階建ての板葺きの屋根に煉瓦の煙突を持った建物だ。新しい生活の場合は、ラパハノック川から少し離れていたが、小さなせせらぎがあつて生活用水には困らない。薪を集めるのに便利な雑木林がなだらかな畑の中に点在している。

ワシントンが7歳の誕生日を迎えたのは、このフェリー農園と呼ばれる地所であつた。そして、1754年までフェリー農園はワシントンの住居になる。

ワシントン一家の住居には、陶器のティー・セットや銀のスプーン、鏡などささやかながら富の片鱗を窺わせる調度品が備え付けられている。どれもが贅沢品である。

当時の一般的な家庭は、ティー・セットはおろか食器ささろくに持つていない。せいぜい木製か白目製のコップが数個、木皿が数枚である。もしデザートがあれば、皿をひっくり返して使っていない側を使う。食器は家族で同じ物を使い回す。銀のスプーンも普通の家庭には見られない。木や貝を加工したスプーンが一般的である。

つまり、陶器や銀製食器は上流階級のものであつて、庶民はそのようなものには縁が無い。例えばベンジャミン・フランクリンは次のように言っている。

「私の朝食は長い間、パンと牛乳であつた(紅茶はない)。そして、私はそれを土器の皿から白目のスプーンを使って食べていた。しかし、家庭に贅沢品が入って来ること進歩を知ることが出来る。ある朝、朝食に呼ばれた私は、銀のスプーンで陶製の皿から食べるようになったのだ」

フランクリンは貧しい職工の家に生まれ、年季奉公人から身を起こして財を成した。それを食器が変化したことで実感したというわけだ。

普通の人々にまでイギリスで生産された様々な製品が普及し始めるのは1730年代以降である。すなわち、ワシントンが成長した時代は、普通のアメリカ人がごく当たり前に多様な日用品を使うようになる消費革命が静かに進行し始めた時代と重なる。

いずれにせよ、少年時代のワシントンの住居を見れば、ワシントン家が曲がりなりにも上流階級に属していたことが分かる。着実に富を増やしたオーガステインは、約50人の奴隷と約1万エーカー(約4,000ヘクタール)の土地を所有するまでになった。最上層とは言えないが、辛うじて一流の郷紳と言えるだろう。

ワシントン一家が住んでいた地所は、渡し舟を使えばすぐにフレデリックスバーグに行くことができる。

フレデリックスバーグは、1671年に入植が始まった街である。ヴァージニアの主要都市の1つに数えられる。植民地を南北に貫く道が通っている。フェリー農園は、祭日や郡庁

が開かれる日には決まって街を訪れる多くの旅人が行き交う。当時のフレデリックスバーグの様子を旅人は次のように記している。

「フレデリックスバーグは、ラパハノック川の畔にあり、約800人の住民を抱えている。川は1マイル〔約1.6キロメートル〕上流の滝があるところまで航行可能である。滝は非常に美しく幻想的である。幾つかの小さな滝が互いに重なり合って急湍の連続をなしている。

この村の近くにある高台からはブルー・リッジ山脈がくつきりと見える」

少年時代のワシントンの目には、このような光景が映っていたのだ。それにフレデリックスバーグの街の様子を見ることは、イギリス帝国がどのように運営されているか垣間見るところでもある。

波止場からタバコ、穀物、鑄鉄など植民地の産品を満載した船が出港するかと思えば、川下から波止場に向けて本国製の日用雑貨や工業製品を舶載した船が入港する。そうした品々は、フレデリックスバーグから海岸地帯だけではなく山麓地帯、そして、遙か先のフロンティアへ流通する。ワシントンは大西洋貿易の一端をその目で見ていた。

フレデリックスバーグは、フロンティアと大西洋という2つの広い世界を結ぶ場所である。すなわち、ワシントンの前には2つの世界が選択肢として示されていた。これからワシントンはどちらの世界を選ぶことになるのか。

カルタヘナの英雄



富裕な家庭がイギリス本国で子弟に教育を受けさせるのはよくあることだ。実に9年近くもローレンスは本国に滞在している。

兄と弟が初めて相まみえた時、ワシントンは6歳でローレンスは20歳。先述のようにオーガSTEINの子供は全部で10人を数えるが、成年まで達することなく3人が夭折している。ローレンスが生き残った子供の中で最年長である。

10人中3人も夭折しているのは、現代の基準からすれば奇異に見えるかもしれない。しかし、それは珍しいことではない。この当時は子供の死亡率が非常に高く、歩くことができないまでに4分の1の子供が命を失い、さらに4分の1が9歳を迎える前に亡くなっていた。14人の子供を10歳になる前にすべて亡くした夫婦さえいる。

ローレンスは、イギリスでの教育を通じて優雅な物腰を身に着けている。肖像画によれば、ローレンスは大きな黒い瞳と丸い顎を持った柔和な人物である。軍服を纏っているが粗野な軍人という感じはまったくなく、洗練された都会人のように見える。

事実、ローレンスは非常に社交的な人物である。それは当時の社会では、高い政治力を有していたことを意味する。

後に測量技師の道を進むことになるワシントンと比べると、ローレンスには数学的能力が欠けていたが、それを補うのにあまりある豊かな古典的教養、すなわち当時の紳士に最も必要とされた教養を修得している。ローレンスの手紙を読むと端々からそうした教養が匂うようである。

小さな街に過ぎないフレデリックスバーグの光景でさえ、まだ幼いワシントンにとって広い世界だ。しかし、それよりもっと広い世界への扉を開ける人物とワシントンは出会う。異母兄ローレンスである。

ワシントンがローレンスに初めて会ったのは1738年のことである。それまでローレンスは、ワシントン家のしきたりに従って植民地を離れてイギリス本国で教育を受けていた。

ワシントン、今まで顔も知らなかった兄にたちまち魅了される。14歳も離れている兄である。まだ子供のワシントンに比べてはるかに大人であり成熟している。遠く見知らぬイギリス本国の話をワシントンは兄にせがんだのだろう。

そうした話に加えて少年の心を奪ったのは戦争や軍隊生活の話だ。平和な時代だったとはいえ、そうした話とまったく無縁ではない。ワシントンが住んでいるノーザン・ネック地方は、早くから発展した海岸地帯に属したが、それでも2、3日、馬に乗って西に進めば、未開の原野が広がっている。そこには部族間で抗争を繰り広げるインディアン姿が見られた。

ワシントンの兄への敬意がさらに増す出来事が起きる。1740年のカルタヘナ出征である。カルタヘナ出征はジェンキンスの耳戦争の一環として知られている。

このカリブ海を制圧するための作戦を指揮したのは、50代半ばのエドワード・ヴァーノン中将である。ヴァーノンは、絹と毛の粗布であるグログラム地の外套を悪天候の時に愛用していたことから「古グログ」という異名で知られている。

今ではこのグログという言葉は、レモン汁や砂糖を加えて水で割ったリキュールを意味するが、その語源はヴァーノンの異名である。なぜヴァーノンの異名がリキュールの名前になっているのか。

まず物語に登場する船乗りを思い浮かべて欲しい。必ずと言って良い程、ラム酒を飲んでいないか。船乗りはラム酒が好きなのか。中には別にラム酒が好きではない船乗りもいても

おかしくない。それでも船乗りには、ラム酒を飲まなければならない理由があった。当時の航海事情が関係している。

長い航海で一番問題になることは何か。新鮮な水の確保である。

現代のように冷蔵庫もなく、密封したり、塩素を添加したりする技術もない時代である。水を大樽に詰めて船に積んでも2、3週間もすれば、雑菌のせいで醜い臭いが充満して飲めなくなってしまう。そこで水の代わりに使用されたのがラム酒だ。アルコール類が保存に適していることは言うまでもない。つまり、やむを得ない理由で船乗りはラム酒を飲まなくてはならなかった。

もちろんヴァーノンはこうした事情を理解していた。それでも困ることがある。船乗りが酩酊してしまうという時に役に立たない。そこでラム酒を水で割って配給するように命じる。これは船員達の不評を買う。私はお酒をまったく嗜まない人間なので実はよく分からないが、まずい水でラム酒を割ると当然ながら美味しくないのではないか。船員の不評を買った原因はそのあたりにあるのだろう。

忌々しい飲み物、すなわち水割りラム酒を船員達はグログと呼ぶようになったという。その後、海員用語として使われていたものが一般にも広がる。レモン汁が加えられるようになったのも意味があつて、もともと船乗りが最も恐れる壊血病を防止するためのビタミン補給源である。はたしてそれで美味しくなったかどうかは分からない。

1739年7月19日、ヴァーノンの艦隊は、スペインと戦端を開くように命令を受けて、西インド諸島に向けて出発する。

10月19日までに正式に宣戦布告が行われる。

ジャマイカ島のポート・ロイヤルから出航したイギリス艦隊は、パナマ沿岸のポルト・ベロ（現ポルトベロ）を攻撃する。ポルト・ベロは僅かな時間で降伏。この成功は植民地人の心をも沸き立たせる。

さらにヴァージニア人を興奮させたのは、引き続き作戦に3,000人の植民地人が民兵として召集され、アメリカ連隊が結成されるという報せであった。そして、兵員提供の義務を負う植民地総督が士官を任命するという。

軍隊で名を上げようと志す富裕な農園主の息子達は、自分こそ士官に任命されるのにふさわしいと夢見る。もちろんそれはローレンスも同じだ。もし士官になりたければ、一番の近道は自ら兵士を募ることだ。そうした兵士は、イギリス軍の士官によれば、「鍛冶屋、仕立屋、床屋、靴屋、そして、あらゆる種類のならず者」からなっていたという。たとえならず者であろうが、数さえ揃えば問題ない。総督もイギリス軍から求められた数の兵士を集めるのが楽になるからだ。

ローレンスが十分な数の兵士を募集した痕跡はない。兵役に魅力を感じる者がほとんどいなかったからだ。浮浪人、掏摸、元受刑者などが集められるが、ともに軍服を着ているのは5、6人に1人という惨状である。

それでもローレンスの名前は、部隊を率いる4人の士官の名前を総督が総督参事会に告げた時、一番上に置かれていた。

ローレンスは、イギリスで教育を終えて帰って来たばかりの青年で軍事経験はまったくない。ではなぜそのような厚遇を得ることができたのか。オーガステインとローレンスが有力

な後援者を得ていたからである。

当時の戦争ではよくあることだが、辞令を受けてから実際に出征するまでに時間が掛かる。総督がローレンスの任命を総督参事会に通告したのは6月のことであったが、輸送船の準備が整ったのは少なくとも8月である。新たに大尉となったローレンスは、10月になつてようやく西インド諸島に出征する。

1741年1月、イギリス軍のトマス・ウェントワース将軍は、到着したアメリカ連隊を閲兵する。

兵士として満足に戦えるようにするために訓練を施す必要がある。しかし、訓練しても使い物になるのだろうか。

それがアメリカ人を見たウェントワースの率直な感想である。

アメリカ連隊の士官達に対するウェントワースの評価はもつと厳しい。もちろんその中にはローレンスも含まれている。ウェントワースが、アメリカ連隊の士官達が戦場で怖じ気付いて逃げ出してしまうのではないかと考えて、イギリス軍から新たに士官を任命することにした。

それを聞いたアメリカ連隊の兵士達は猛然と反対する。自分達の連隊の士官に愛着を持っていたからだ。他の士官の下で働くつもりはないと抗議する。それが民兵の気質というものだ。

さらにウェントワースは、民兵隊が厄介な存在であることを知る。軍規に従おうとしないのだ。民兵は、植民地議会から報酬を受けて一定期間の兵役に就く契約で従軍している。彼



らは職業兵士ではない。したがって、軍規に従うつもりはない。それに契約が遵守されていないと判断すれば、即座に兵役拒否に訴える。

結局、ウェントワースは、アメリカ連隊がイギリス兵の足手まといになると考えて、船に閉じ込めたままにすれば問題ないを考える。もちろん表立ってそう言うては角が立つので、何かと理由を設けてそうするつもりだ。

2月、8,000人のイギリス兵と3,700人のアメリカ連隊は、ヴァーノンの艦隊に乗り込んでジャマイカを発つ。そして、1ヶ月の航海を経て、カルタヘナ沖に到着する。

カルタヘナは、現コロンビアの北部にある港町で、16世紀以降、スペインの最も重要な投錨地であり、新大陸から集められた金銀が集積され本国に積み出されている。その重要性から早くから要塞が築かれていた。つまり、カルタヘナを攻略することは、スペインの新大陸における植民地全体を抑えるのに等しい。

港の攻略はすぐに成功する。しかし、要塞をどのように攻略するかについてウェントワースとヴァーノンは意見を違える。水陸両軍が連携しなければ作戦はうまくいかない。議論が続いている間、待機していた兵士達は赤痢やマラリアに苦しめられる。議論が終わって最終的に方針が決定する。要塞に強襲を仕掛ける。それが結論であった。

4月9日に強襲が敢行された時、ローレンスはヴァーノンの旗艦からそれを見ていた。アメリカ連隊は船に閉じ込められたままで活躍の場を奪われていたからだ。

結局、強襲は失敗に終わる。それから後の作戦は悲惨そのものである。軍医は懸命の努力を行ったが、病気や怪我が悪化して生命を落とす兵士が絶えない。軍規は乱れ、士官達は殺

気立った兵士達を恐れて避ける始末である。船の上から死体が投げ捨てられる。ヴァーノンの艦隊は、南国の美しい海に膨れ上がった死体を点々と残しながら撤退する。

実働兵士数は、イギリス兵が2,000人とアメリカ連隊が1,100人まで落ち込む。

出征した時の半分にも達しない。

毎日、兵士達の遺骸が海に投げ込まれるのをローレンスは見ていた。喜ぶのは海の中の鮫だけだろう。誰もが自分も同じ運命を辿るかもしれないと暗鬱な気分になるのも仕方ない。

暗鬱な気分を振り払おうとローレンスは、郷里に宛てて手紙を書く。

「敵軍は我が軍の600人を殺害し、多くが負傷し、気候が多くの者の命を奪いました。各連隊に大幅な変更が加えられました。幾つかの連隊は兵士の数が3分の2になる程、弱体化

しています。『中略』。我々の連隊は、期待通りには扱われま

せんですが、そうした任務にも耐えなければなりません。実

際、戦争は想像以上に大変恐ろしいものです。我々はここで通常の日課を過ごすことに慣れ、騒音や砲声を聞くことにも慣れました」

もちろんワシントンも兄の手紙を読んだはずだ。ただ自分が

兄よりもはるかに長く兵馬倥傯の中に生きることになるとは、

この時はまだ想像すらできなかっただろうが。

この手紙が書かれて暫く経った後、アメリカ連隊は解散され



る。ヴァーノンとウェントワースがカリブ海を制圧する作戦を断念したからだ。そもそもカリブ海を征圧する作戦を実行するためにアメリカ連隊は編成された。作戦自体が取り止めになれば、もはや存在理由はない。

結局、アメリカ連隊はカルタヘナまで何をしに行ったのだろうか。その疑問に答えられる者は誰もいない。しかし、実情を知る者は少なく、カルタヘナに出征した者は植民地で英雄として迎えられる。

この戦争で1つ重要なことは、植民地から出征した民兵が「植民地人」や「属州人」という言い方ではなく、公式に「アメリカ人」と呼ばれるようになったことだ。アメリカ人がアメリカ人として最初に戦った戦争、それがジェンキンスの耳戦争である。

ローレンスの従軍経験が少年の心をどのように動かした

かは明らかではない。しかし、ローレンスに対する敬慕

は、後にワシントンが軍務に入る大きな要因になったのは間違いないだろう。人間は尊敬する人物の影響を大きく受けるものだ。ワシントンにとって軍務こそ榮譽を得て社会

の階梯を登る近道であった。

兄の影響を受けてか、少年ワシントンは、学校で友人達を兵隊に見立てて進軍や閲兵を行ったり戦争ごっこをしたりに遊んだという。その時から既にワシントンは「総司令官」であった。

歴史の断片 桜の木伝説

もしあなたが少しでもワシントンについて興味があれば、桜の木伝説をきくと知っているはずだ。伝説は偉人を彩る強烈な舞台装置である。歴史は偉人の伝説で溢れている。

アイザック・ニュートンが木から落ちる林檎を見て万有引力の法則を考え付いたという伝説。

ウィリアム・テルが息子の頭の上に置かれた林檎を射抜いた伝説。

ジェームズ・ワットが湯沸かしを見て蒸気機関の発明のヒントを得た伝説。

スコットランド王ロバート1世が洞窟中にいる蜘蛛が何度も何度も巣を張るのに失敗しながらも成功するまで決して諦めなかったのを見て、自分もいつかイングランドを打ち破るまで諦めないと決意したという伝説。

クリストファー・コロンブスの卵の伝説。

このように歴史的人物には数えきれない伝説がある。そのどれもが逸話として面白く、また偉人の人間性を端的に示しているから人口に膾炙している。もし逸話が偉人の人間性に合っていないければ、人々の記憶に残らなかっただろう。

桜の木の伝説も同じであり、幼少期のワシントンを語れば、



避けられない話題である。ワシントンの人間性、正確に言えば、ワシントンがこうあって欲しいという人々の願望から桜の木伝説は定着した。

桜の木伝説を改めて確認するとともに、なぜそのような伝説ができたのか考えてみたい。以下はその伝説の最も有名な部分である。

ワシントンが6歳の頃、父オーガスティンが大事にしていた桜を切ってしまったことから話は始まる。

「庭のあそこにある小さな美しい桜の木を切ったのは誰か」

オーガスティンは少年を詰問する。

「お父さん、僕は嘘をつけません。僕が嘘をつけないことはお父さんもよく分かっていますよね。私の手斧で桜の木を切りました」

ワシントンは少しもたじろぐことなく答える。

「我が息子の英雄的行為は、銀を咲かせ純金を実らせるような何千本の木にも優るものだ」

桜の木伝説は、メイソン・ウィームズ(通称ウィームズ牧師)という人物が書いた『ジョージ・ワシントンの生涯と記憶すべき行い』という本に掲載されている。桜の木

の話は、明らかにウィームズの創作である。しかもウィームズはその他にも多くの伝説を生み出している。ウィームズは情報源として「素晴らしい淑女」という人物を挙げているが、それが誰なのか、そもそも実在の人物であるか否かさえまったく分かっていない。

様々な異論はあるものの、桜の木の伝説は、ワシントンのイメージを定着させるのに大きく貢献したことは間違いない。つまり、桜の木の伝説が流布したことで多くのアメリカ人がどのようにワシントンを理想化していたのかが窺える。自分達が望ましいと信じる人物像を偉人に反映して賞賛することはよくある。

アメリカ人にとって正直であることが何よりも大事なことであり、ワシントンにもそうあって欲しかったのだ。だからこそ桜の木の伝説は根強く人々の心に残った。そして、ウィームズの伝記が流布した19世紀初頭のアメリカは、新国家としてまさに発展の第一歩を踏み出そうという時期であつた。そのような時だからこそ人々は、自分達の道標となる国民的英雄を必要としたのだ。

喪失こそ成長の糧

1742年6月、次兄のオーガステイン（愛称「オースティン」）が本国での教育を終えて帰国した。次兄に会うのはこれが初めてである。ワシントンは次兄にもすぐに親しみを感じたが、カルタヘナの要塞をその目で見て、砲声をその耳で聞いたローレンスに優る兄は他にはいない。

次兄が帰国したこと、そして、自分の年齢を考えて、今度は自分がイギリスに渡って勉強する番だとワシントンは期待したに違いない。しかし、その期待は裏切られた。父が亡くなったのである。

それはワシントンが親戚の家を訪ねていた時のことであつた。

楽しい夕餉の席に、世話係のピーターがオーガステインの急病の報せを持って駆け込んで来る。それは時の流れによつてすべての人にもたらされる喪失であり、ワシントンが経験した多くの喪失の中で最初に心に残る喪失であつた。少年はその報せを聞いて畏怖のような感情を抱いたが、状況がどれ程、深刻かをまだ分かつていない。

少年はピーターの後ろに騎乗して帰宅する。そして、放心状態になっている母を見つける。母は少年を父のベッドの脇に連れて行き、「お父さんが死にかけている」と泣き叫ぶ。

激しい痛みに呻き声をあげながらもオーガステインは、周りの子供達に順番にキスをして、「お母さんに良くしてやってくれ」と少年に言う。ワシントンは、母の一生の間、約束を守るとベッドの脇で泣きながら跪いて誓う。

オーガステインはその夜、亡くなった。享年49歳。オーガステインの急死について原因

はよく分からないが、嵐の中で馬に乗っていて体調を崩したのが原因であつたという。

こうした喪失は人の成長を促すと私は思う。

少年時代、私は、永遠に変わることなく祖父が祖父であり、祖母が祖母であり、父が父であり、母が母であると無邪気にも思っていた。今から思えば少年時代の幸福とは、そうした幼い意識にあつたように思う。しかし、祖父が亡くなった時、私は、祖父が、かつては子供であり、親となり、祖父となり、そして、この世を去っていったことを改めて悟った。

ごく当然の事実だが、少年時代の無邪気な私にとって、それは大人になるための一歩であつた。人は成長して変化するものだ。少年時代の私は祖父を失つたことで現実的に理解した。

ワシントンも同じように思つたかもしれない。オーガステインの死によつて、あまりに早かつたが、ワシントンは心の中でその少年時代を終えた。

時に1743年4月12日のことであつた。オーガステインの一生は、家運の興隆を目指して地位と富、そして、栄誉を得るために捧げられた。

オーガステインの遺産の大半は、限嗣相続に従つて異母兄ローレンスが相続する。オーガステインが子供達に遺した土地は、すべて合わせると1万エーカー（約4,000ヘクタール）を超えていた。もう少し手を伸ばせば、一流の郷紳だと誰に言つても恥ずかしくないだろう。

ローレンスは西インド諸島から帰還した後、さらなる栄達を求めてイギリス本国に渡つて軍職に就くつもりであつた。しかし、オーガステインの死によつて、ヴァージニアに腰を落

ち着けることにする。

ワシントンには、21歳になった時に260エーカー(約110ヘクタール)のフェリー農園、フレデリックスバーグの3区画の土地、そして、10人の奴隷が分与されることになっている。

フェリー農園は、オーガステインが遺した土地の広さからすると随分狭いように思える。しかし、当時の農園の平均的な広さであるから、もしワシントンが普通の農園主として身を立てるのであれば十分な広さである。

父の死後、ワシントンは14歳年上のローレンスを父親代わりにして成長する。

この一回り以上も年上の兄は、子供に質問されるとそれを無視せずに仕事の手を止めて優しく答えるような男であった。頻繁にマウント・ヴァーノンに顔を出す弟を温かく迎え入れる。このマウント・ヴァーノンは、オーガステインが息子のために自分の地所の中に建てたもので、ローレンスの希望によってヴァーノン中将に敬意を表して名付けられた。

ワシントンにとってマウント・ヴァーノンは非常に重要な社交の場になる。ワシントンの目を新しい世界に向けさせ、社交に必要な礼儀作法を学ぶのにローレンス以上に親切的な教師はいなかった。

18世紀という時代において、礼儀正しきで用心深く自分の心の中にある欲望や感情を包み隠すことは、教養ある社交的な人物と評価されるための重要な条件であった。そうした評価こそ社会で頭角を現そうとする者に成功をもたらす財産であった。マウント・ヴァーノンで早くから社交を学んだことはワシントンにとって大きな資産となる。

ローレンスは、ヴァージニア植民地で勢力を持つフェアファックス家の姻戚となり、その後援を得てヴァージニア植民地議会議員やヴァージニア植民地全軍の総務将校になることができた。

総務将校は実質的に司令官と言ってよい。1728年に創設され、様々な地域から集められる民兵の連携を図り教練を行う責務を担う役職である。ただこの当時のヴァージニア、特に海岸地帯では民兵制度は形骸化していて、そうした役職はほとんど名誉職に近い。

ローレンスが結び付いたフェアファックス家は、実に500万エーカー(約200万ヘクタール)・四国全体とほぼ同じ面積にわたる広大な土地を支配するヴァージニアきつての名家である。国王から北アメリカの植民地の特許状を得たLord Proprietor(領主)と呼ばれる貴族の家柄だ。

ローレンスの後ろ盾のお蔭でワシントンは、フェアファックス家と親交を深めることができた。そうした有力者との繋がりは、当時のヴァージニアでは非常に重要である。なぜなら地位や昇進、契約などを得るのにそうした繋がりが不可欠であったからだ。公職であろうと家業であろうと、海軍であろうと陸軍であろうと、また法曹であろうと商業であろうと、成功するためには私的な繋がりが鍵であった。植民地時代のアメリカは確かに本人の実力も重要であったが、それだけで成功することはなかなか難しかった。

兄の結婚以後、ワシントンの訪問先にフェアファックス家が居住するベルヴォアが加わる。



ベルヴォアは、マウント・ヴァーノンから下流に4マイル(約6.4キロメートル)の場所にある美しい農園だ。その主は、ローレンスの舅のウィリアム・フェアファックスである。この頃、まだマウント・ヴァーノンは今にも残されている姿のような壮麗な姿ではなかったが、ベルヴォアはフランス語で「美観」という名にふさわしい煉瓦造りの壮麗な邸宅であった。この邸宅は、本国から輸入された豪華な絨毯や高級な家具、壁紙、鏡、

楽器、書籍などで飾られ、フェアファックス家の栄光を伝えている。

少年は、ベルヴォアでまだ見ぬ旧世界の華やかで典雅な世界を垣間見る。兄夫婦はマウント・ヴァーノンとベルヴォアを行き来して暮らしていたので、少年がベルヴォアに顔を出す口実は幾らでもある。後にワシントンは、「ベルヴォアの一家と仲良く暮らすことは我々のような若者に非常に役に立つ」と弟のジョンに書き送っている。

兄ローレンスはすべてを持っていた。イギリス本国で身に着けた洗練された物腰、豊かな教養、従軍経験、美しい妻、有力な後ろ盾、そして、財産。ワシントンにとって兄は輝かしい存在であった。羨ましくはない。兄が自分とはまったく違う存在なのだと少年は思っていたからだ。ワシントン家の中では兄が太陽であり、自分はその周りを回る惑星に過ぎない。

海の呼び声

1746年9月8日のことである。

ワシントンには、フレデリックスバーグに所用で滞在していたウィリアム・フェアファックスと会う。フェアファックスの手には、マウント・ヴァーノンにいるローレンスからの手紙が握られている。手紙は2通ある。1通はワシントン宛で、もう1通はメアリ宛だ。

手紙を渡す時にフェアファックスは、手紙をよく読んで考えるようにワシントンに忠告す

る。そして、ローレンスから手紙を

受け取ったことをメアリに内密にしたほうがよいと付け加える。ワシントンは忠告に従うと約束した。はたしてローレンスの手紙はどのような用向きであったのか。

ローレンスは、弟の将来をまるで我が子のように案じていた。弟をこのまま小さな農園主にするのは惜しいと考えたのであろう。ローレンスは、ウィリアム・フェアファックスと協力してイギリス海軍の少尉候補生になるようにワシントンに勧める。近くのアレクサンドリアの街に

イギリス海軍の艦船が丁度、停泊していた。かつてカリブ海へ出征したローレンスにとって海へ乗り出すことは成功を手にする早道だ。

メアリに宛てた手紙には、海軍に入る利点ばかりが並べられている。メアリに何の心配もさせまいとする心遣いである。

ワシントン自身は、海軍に入ることが本当に自分の望みかどうか実はよく分かっていない。あまりに急な話で実感が湧かなかったのだろう。しかし、尊敬する兄の言うことならき

つと素晴らしいことに違いない
と
思
っ
て、兄の勧めに乗っ
つ
て
み
る
こ
と
に
し
た。

ただ少尉候補生になるにあ
つ
て
問
題
が
あ
る。

ワシントン家は、イギリス海軍にほとんど縁故がなかった。少尉候補生は縁故がなければ、20年、もしくは退役するまで少尉に昇進することさえできなかった。つまり、一生うだつがあがらない可能性がある。その他の選択肢として商船員になることも検討された。



まだ14歳の少年は、自分の道を自分だけで決定できない。広い世界に旅立つには母メリの同意が必要だ。

メリにとって息子がイギリス海軍に入る利点は、息子の将来よりも息子が受け取る給与であった。そうした現金収入があれば家計の足しになるだろう。それでも詳しいことが分からなかったメリは、ロンドンに住む親戚に手紙を送って意見を求める。

親戚の返信によれば、海軍ではイギリス本国の生まれではない植民地人は「奴隷や犬のように」扱われ、昇進も縁故がなければ望めない。商船員になっても強制徴用の危険に晒される。強制徴用はその言葉通り、海軍が人員を補充するために船員を強制的に徴用する行為である。海に進路を求めるより堅実な農園主になったほうがよいというのが結びの言葉であった。

親戚の言葉に加えて、おそらくメリは自分が産んだ子供の中で最年長で頼りになるワシントンを手元に置いておきたかったのだろう。こうして少年が自立する道は絶たれた。

少年の世界はまだ狭かった。しかし、それは当時にあつて珍しいことではない。自分の植民地を出ずに一生を終える人も珍しくなかった。せいぜい馬で2、3日で行ける範囲にいる親戚の家を訪ねたり、最も近くにある都市に行く程度である。

ワシントンの胸の中には、母の面倒を一生見るといふ亡父と交わした誓いがある。もちろんワシントンが成年に達するまで親戚が手を貸してくれるが、それに頼ってばかりもいられない。したがって、誓いを守るために、母のもとを去って海に旅立つことはできない。そう

した決断は14歳の少年にとって過酷なものだ。

女性が男性に比べて少なかった植民地では、寡婦の再婚は当然だと考えられていた。葬儀に出されたご馳走の一部をそのまま再婚の祝宴に流用する女性がいたくらいである。しかし、母メリは再婚していない。どちらかと言えば、オーガステインとの結婚は晩婚であったが、それでもまだ30代半ばである。再婚してもおかしくない年齢である。

再婚しなかった理由は明らかではないが、自分が持つ財産が取り上げられてしまうのを恐れたからかもしれない。

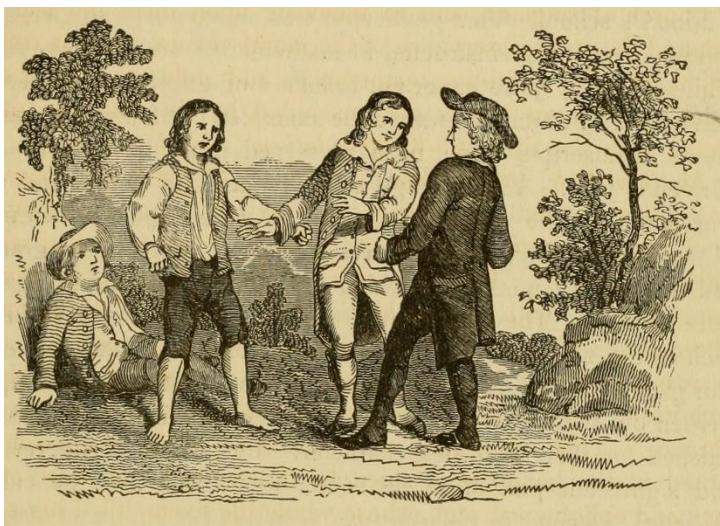
当時の法では、女性は再婚すると財産の管理権を夫に委ねなければならない。もしメリが再婚していれば、家庭と農園の責任は再婚相手が担ってくれていただろう。しかし、メリが再婚しなかったために、そうした責任は父の庇護を失ったばかりのワシントンに委ねられた。フェリー農園の最年長の男としてワシントンは、幼い兄弟姉妹の世話や農園の管理に気を配らなくてはならない。

もしその後の動乱がなければ、ワシントンは自分の小さな農園を耕して母の面倒を見ながら静かに一生を終えて、歴史に名を残すことはまったくなかっただろう。

揺るぐことなき北辰

ワシントンがどこで学んだかはよく分かっていない点が多い。ヴァージニアには現代のような義務教育はなく、基礎教育を施す公立学校のような存在もないからだ。個人が運営している学校しかない。しかし、重要なのはどこで学んだかである。それとどのような学校生活を送っていたのか。学校生活は人格陶冶の重要な場だからである。

他の子供達がホッケーを楽しんでいる一方で、ワシントンは静かに数学に熱中していたという。しかし、時には腕白だったこともあったらしい。ある冬の日、雪合戦をしていた際に目の周りに大きな痣をこしらえ、母メアリは数日間、ワシントンを家から出さなかったという伝承が残っている。

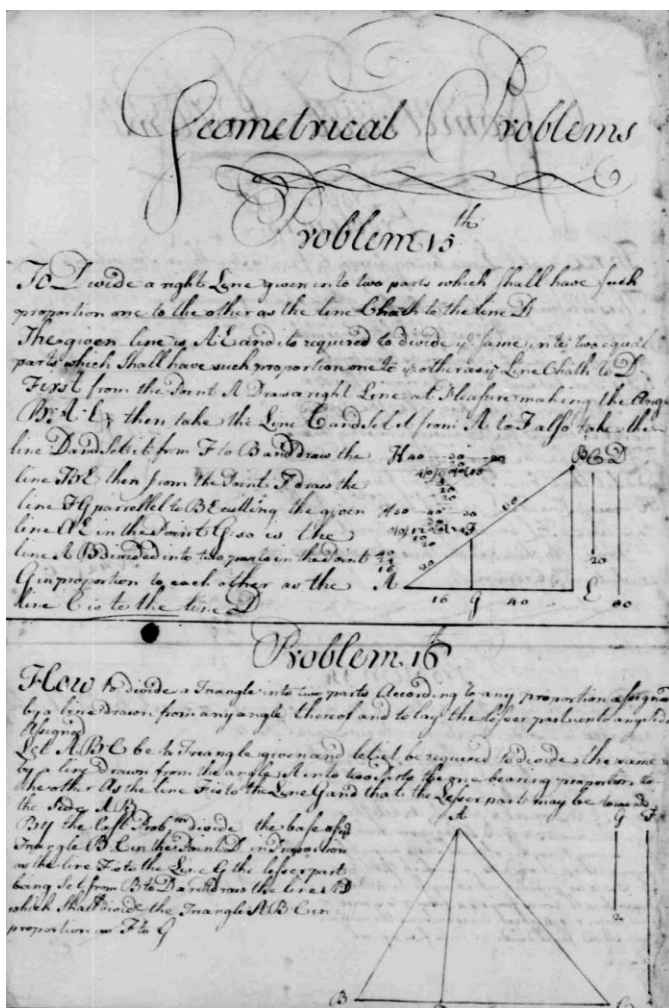


ワシントンは徒競走、レスリング、輪投げなど様々な運動競技を楽しんだ。ワシントンの体格は、父に似て幼少の頃から優れていて生徒達の中で抜きん出た。荒馬に飛び乗って御することもでき、後年の優れた乗り手としての片鱗を示していた。

友人達の尊敬を集めた少年は、よく喧嘩の仲裁役を頼まれた。ワシントンの仲裁に異議を唱える者は誰もいなかったという。

ワシントンは、どのような勉強をしていたのか。残された史料から克明に分かっている。それは当時のアメリカ人がどのようなことを学んでいたのかを示す興味深い一例となっている。ある程度、経済的に余裕ある家の子供であれば、程度の差こそあれ、ワシントンと同様の教育を受けていたと言える。

「手習い帳」と呼ばれるワシントン自身が勉強の際に書いたノートが残っている。ノートの文面を見ると、非常に丁寧に書かれた図形や字で埋め尽くされている。几帳面な性格を窺わせる。良く言えば、整然とした秩序がある。悪く言えば、子供らしい自由闊達な奔放さがない。



その大部分が為替手形、証文、借用証書など法定書式の筆写や測量、幾何、代数、定理、図形などの数学の問題に占められ、主に農園主として必要な知識と社会規範から構成されている。こうした訓練によってワシントンは農園の管理や公文書の起草などの基礎を養った。

主に使われていた教科書は、当時流行していた『若者の友』である。『若者の友』は、「教師がいなくても若者が同じように勉強できる」ように平易な文章で書かれた本だ。そこには農園主として身を立てるのに役立つあらゆる初歩的な知識が網羅されている。

「手習い帳」に書かれたワシントンの文字を見ると、たくさん綴り間違いが見つかる。生涯にわたって綴り間違いがなくなることはなかったが、そもそも英語の綴り自体が非常に流動的であったから間違いとは言えない。現代の我々から見ても綴りて書いてもあまり問題にはならなかった。アメリカで綴りが定着するのは、18世紀末以降のことである。

「手習い帳」には、有名な『交際と会話における礼儀作法』が筆写されている。それは単に教師がワシントンに課した宿題であったかもしれない。昔、日本でも『論語』の音読が子弟の人格陶冶に貢献したのと同じようなものである。『交際と会話における礼儀作法』がワシントンの道徳律に何らかの影響を与えたことは確かである。

『交際と会話における礼儀作法』は、16世紀末にイエズス会がフランス貴族の作法の Handbook として書いた格律で、イギリスを経てヴァージニアにもたらされた。その内容は、大きな声で話したり笑ったりし過ぎてはいけないというマナー、感情を抑制することが大事であるといった教訓、健康法、外見に至るまで多岐に及ぶ。当時の上流階級の礼儀作法がどのようなものであったのか具体的に知ることができるので興味深い。

面白いことに『交際と会話における礼儀作法』には、何かを推奨するよりも何かをしてはならないという禁止事項が多い。それは最低限、禁止すべきことを列挙したほうが礼儀作法として覚えやすいからだろう。

また『交際と会話における礼儀作法』の特徴的な点は、自分を律するための規則集という点にある。しかし、それ以上に他人から良い評価を得るための、もしくは悪い評価を得ないためにどうすればよいかという点に重点がある。

さらに『交際と会話における礼儀作法』が単なる子供の躾ではないことにも注意しなければならぬ。ワシントンが生きていた18世紀という時代は、上流階級の仲間入りをするためには礼儀作法が非常に重要視された時代であった。なぜなら礼儀作法は、立場の上下を明確にする手段だからだ。

確かに『交際と会話における礼儀作法』は礼儀を学ぶためのものだが、先程も言ったように道徳律に影響を与えるものとして重要である。また信頼に足る人物になるための模範でもあった。「道義的リーダーシップ」という言葉があるように、道徳律はリーダーシップを論じる際に欠くことができない要素である。後年、ワシントンも甥に宛てて次のような手紙を書いている。

「善良な道徳的性質は人間にとって最も不可欠なものです。若い頃に身に付けた習慣はいつまでも消えずに残ります。そこ「大学」でのあなたの行動は、生涯を通じたあなたの性質に痕跡を残すことになるでしょう。したがって、教養を身に付けるだけではなく、徳を養うように努力することが非常に重要です」

道徳律は人間の内面の力である。それによって何が正しいかを判断でき、知識が行動に結び付く。北極星のように揺るぎない道徳律を持てば、状況に左右されることなく正しいことを貫く勇気が得られる。

勉強の中でもワシントンが最も熱中したのが測量である。

18世紀当時、測量技術は極めて重要な技術であった。なぜなら未だに境界が定まっていない地所を正確に測量して領域を確定する必要があったからだ。ワシントン自身も測量技術は、「大きな地所を所有する者にとって何よりも必要な」技術であると書いている。

ワシントンは、父が使っていた測量器具を倉庫から引っ張り出して測量に励むようになる。マウント・ヴァーノンで兄と客人達の前で腕前を披露している。

奴隷をお供にワシントンがカブ畑に立っている。しきりに測量器具を覗き込み、助手の奴隷にきびきびと指示を下す。気怠い午後だ。日射しも厳しい。客人達は遠くから見守っていたが、飽きてしまったのかテーブルでカード賭博を始める。

その間もワシントンは熱心にカブ畑の周りを飛び回り、図面を描いている。やがて図面が完成したのか、少年は得意げな顔で図面をテーブルに置く。客人達は少年の腕前を褒めそやす。所詮、子供のやることだからと思つて褒めそやしたのか。そうではない。図面は畑の境界や面積が緻密に記入されていて非常に見事なものだ。

ワシントンが学校に通っていたのは14歳か15歳までであると考えられる。最後の記録

の日付は1747年である。基礎教育を修めたワシントンであったが、その当時、外交の場で多く用いられていたフランス語や文学を学ぶ機会に恵まれず、さらに大学に進学する機会も得られなかった。

当時は現在のように大学進学率はあまり高くなく、また農園の管理を生業にするつもりであったワシントンにとって大学教育は必須ではない。そのためワシントンが18世紀の紳士の嗜みとして重要なラテン語や古典文学などを学んだ形跡はほとんどない。

僅かな痕跡はホメロスのラテン語訳本で、その見返しにラテン語で「この小さな本を私に返して下さい。もし中を見て私が誰かあなたに分かるのであれば。そう私は率直に申し上げます。私の名前はジョージ・ワシントン。ヴァージニア、フレデリックスバーグ」と書かれている。つまり、ラテン語の基礎ぐらいは学んだようである。

それだけでも当時の一般的な水準からすれば立派なものだ。なぜなら本も読めず自分の名前も書けない者は珍しくなかったからだ。例えば فرانクリンは、正規の学校教育を2年間しか受けておらず、自力で学識を修めた。女性に至ってはまったく正規の学校教育を受けずに終わることも稀ではなかった。普通の人々の教育水準はその程度である。

長じて後にワシントンは、自分の教育が不完全であったと認めている。親戚の若者に向かって「誤つて使つたすべての時間は永遠に失われ、あなたの人生で失われた日々は将来、取り戻すことができない」と論じている。

それでも一般的な水準からすれば、ワシントンが受けた教育は十分な水準に達している。しかし、ラテン語や古典文学に関する高い教養は、ヨーロッパ文化を知る主要な手段だったので、大学教育を受けた者からすれば、ワシントンは田舎者に見えたかもしれない。後に第

2代大統領のジョン・アダムズは、ワシントンを「その身分にしては無学過ぎるし、文盲で教養が無い」と酷評している。

このように一見すると十分な教養を持たなかったワシントンが、各植民地の枠組みを超えてアメリカという大きな物差しで物事を考えられるようになったのは驚くべきことである。

ワシントンの視野を広めたのは、様々な経験を通じて得られた経験知であった。経験知こそ思索で得られた知識よりも尊いという考え方はアメリカ人の中で脈々と受け継がれる哲学である。

星の娘を狩る

アメリカ人は、イギリス本国の貴族を見る機会に滅多に恵まれなかった。多くの貴族達は植民地にやって来ても、自分達の土地を管理する事務所を設立するだけで、実務を管理人に委任して本国にすぐに帰ってしまうのが常であったからだ。貴族達からすれば、アメリカはすべて未開の荒野で住みたいと思える場所ではない。

この当時、北アメリカ植民地に居住する貴族が1人だけいた。その名前を第6代キャメロン男爵トマス・フェアファックスという。

フェアファックス卿は、50代半ばを過ぎた男で、丈高く痩身、灰白色の瞳と鉤鼻を持つ。ヴァージニアの広大な地所は、母方の祖父がチャールズ2世から拝領したものである。1739年にヴァージニアに渡ったフェアファックス卿は、1年間滞在して自分の地所をしつくり視察した後、満足して帰国した。

詳細は不明だが、若い頃に恋に破れたか何かの理由で結婚せず独身を貫いている。かなりの女嫌いであつたらしい。それに執事が裏切つて不当に安い値段で地所を売却するという事件もあつて、イギリス本国にほとほと嫌気がさしていたようだ。

ヴァージニアの風物とそこに住まう人々を気に入ったフェアファックス卿は、老後を植民地で過ごすそうと想着て再び渡来する。おそらく1746年頃だろう。その滞在先は、従兄弟のウィリアムがいるベルヴォアであつた。

ワシントンは、この男爵の爵位を持つ正真正銘のイギリス貴族に会える機会を逃そうとはしなかった。鋭い観察力を持つフェアファックス卿は、どうやら少年の中に奥深く潜む本性を見抜いていたようで、「彼が癩癩を抑えられればよいのだが、怒りや激発の発作を時に正



当な理由もなく起こしがちである」と記している。

狐狩りがフェアファックス卿とワシントンを結び付けた楽しみであつた。狐狩りはイギリス貴族の嗜みである。そして、ヴァージニアで狐狩りをするためには、荒野を走る馬をうまく御する技術が必要とされる。フェアファックス卿は、ワシントンが馬術に優れているのを認め、狐狩りを楽しむ時はいつもワシントンを伴つた。

こうしたフェアファックス卿との親交は、ワシントンに貴重な機会をもたらす。フェアファックス卿が所有する西部の土地の大部分は、まだ正確に測量されていない。さらに無断居住者が入り込んでそうした土地を勝手に占有している。

無断居住者を追い出さか、それとも適当な賃貸契約を結ぶように同意させるには、まず土地がどのような状態にあるのか確認する必要がある。確認とは土地を測量して販売や賃貸に適した大きさに土地を分けることである。

フェアファックス家を代表して、ウィリアム・フェアファックスの子ジョージ・フェアファックスが測量団に参加する。ワシントンはベルヴォアの客となることがしばしばあつたの

で、ジョージ・フェアファックスと既に友人であった。そのためジョージ・フェアファックスが測量団に加わるようにワシントンを誘うのは自然な流れである。もちろんフェアファックス卿の意向もあつただろう。ワシントンは、測量技師の助手として測量団に参加することになった。

1748年3月11日は、ワシントンの少年時代にとって記念すべき日である。

その日、ワシントンとフェアファックスは測量団に随行するために旅立つ。家から遠く離れて旅する初めての機会であり、フロンティアをその目で見る初めての機会でもあつた。

当時の植民地はまだ内陸部深くまで発達しておらず、ヴァージニア西部は発展途上にある。未開の地に行く旅はこれまでの経験にないことだ。

ワシントンは16歳を迎えたばかりであつたが、その身体は父の体軀を受け継いで既に大人と変わらない大きさである。それに測量の基礎は完全に頭の中に入っている。馬術も大人顔向けの巧みさであり、良い土地を見極める目を持つ。それでいて決して老成した様子でもなく、若者らしい活気に溢れている。それがワシントンという若者であつたが、まだその稟質を知る者はごく少数に限られていた。

測量団は順調に旅を続けてブルー・リッジ山脈の尾根に到達する。ブルー・リッジ山脈はアパラチア山系の一部であり、遠方から望むと青く霞んで見えることからその名がある。

眼下には、これまで見たこともないような美しい光景が遙か南の地平線まで広がっている。

すぐ近くまで迫った青みがかった山々の頂を見れば、踏み荒らされることのない雪が陽光を反射して銀色に輝く。しかし、麓には既に春が訪れている。まるで忘れられた庭園のように名もない花々が峡谷を彩る。雪解け水で嵩を増した溪流が砂糖楓の林を縫って峡谷を潤す。そして、緩やかなうねりが重なる地形は農地として豊かな実りを約束している。

インディアンは、あまりの美しさにその溪谷をシェナンドー、すなわち彼らの言葉で「星の娘」と呼んでいた。

目的地に到着したワシントンは測量作業で一生懸命働く。そこはシェナンドー川とポトマック川の合流地点から少し離れた場所である。無断居住者が思い思いに開墾の手を伸ばしていたが、彼らの粗雑な耕作でさえ驚くべき豊かな収穫をもたらしている。

粗末な夕食の後、ワシントンは服を脱いで寢床に潜り込む。

驚いたことに、それは藁を掻き集めただけの代物で、シラミやノミといった害虫で重さが2倍になった擦り切れた毛布の他はシャツさえもない。それまでワシントンは、寢床というのはシャツがあるのが当然だと思っていた。仕方なくワシントンは起き上がって服を着て、他の人達がやっているのを真似てそのまま横たわる。

ワシントンの日記には、荒野での生活が淡々と綴られている。そうした箇所を読み飛ばして、3月23日の日記を見てみよう。

その日の午後、ようやく雨が止み、空は晴れ渡る。しかし、川の水嵩は高く、道がぬかるんでいたので旅路は捗らない。意気消沈する測量団の前に、どこからともなく、たった1枚の頭皮をぶら下げた戦争帰りらしき30人余りのインディアンが姿を現す。

この当時、インディアンの勢いはまだ完全には衰えていない。北から南まで北アメリカ植民地の近隣に居住するインディアンの人口はすべてで10万人程度であった。

インディアンと一口に言っても、多くの諸部族に分かれている。インディアン諸部族は、時には優れた指導者の下で大同盟を組むことがあったが、離合集散を繰り返すのを常とした。

アメリカ人との関係も一概に敵対的であったわけではない。もちろん一部には徹底的に白人を排除しようとする部族もあったが、交易に喜んで応じる部族もあり、イギリスやフランスと手を組んで同盟者として戦う部族さえあった。



測量団は蒸留酒をインディアンに与える。蒸留酒は白人によって持ち込まれ、嗜好品として瞬く間にインディアンに広まっていた。

インディアンと聞くと、羽飾りで飾り立てた衣装というイメージがあるかもしれない。しかし、インディアンの衣装も様々であり、羽飾りを付けた西部劇でお馴染みの姿はごく一部の部族に限られ、多くのインデ

イアンはそのような格好をしていなかったし、中には交易で入手した衣装を着て白人の入植者と変わらない姿をしている者も多い。

測量団から貰った蒸留酒を飲んで上機嫌になったインディアンは、ワシントンの前で戦争の踊りを披露する。

インディアンは広がって大きな輪を作り、真ん中に大きな火を焚く。それからその周りに座る。話し手が現れて何やら話している。どうやら戦士達の武勲を褒め称えているようだ。さらに焚き火の周りに座った者達に踊り方を教えているようである。

話が終わった後、最も優れた踊り手が、滑稽な感じで、まるで眠りから覚めた者が跳び上がるように、人の輪の周りを走りながら跳び上がる。

その後に残りの者が続き、奏者が楽器を叩き始める。

楽器は、水を半分程度入れた容器で鹿皮がぴんと張ってある。叩き棒は、カタカタと音が鳴るようになっていて、見栄えがよくなるように馬の尻尾の一部が付けられている。賑やかな音とともに踊りがいつ終わるともなく続く。

そうした光景は、測量団の多くの者にとって特に珍しいものではない。しかし、ワシントンにとって初めて目にする光景だ。目を瞠ったワシントンは、飽くことなく踊りの輪を見つめている。少年の心に浮かんできた思いは何か。その筆致から窺い知れるのは、驚きと純粋な好奇心である。

インディアンと別れを告げた後の日記をさらに読み進めよう。特筆すべき点は、測量団のテントにやって来たドイツ系入植民の話だ。

ワシントンは、彼らのような入植民を見たのは初めてだったので、何事も見逃すまいと詳細を追っている。ただ彼らが英語をほとんど話せないのには辟易したようで、「彼らがインディアンと同じくらい無知な人々の群れのようだ」と私は本当に思った。彼らはまったく英語を話すことができず、話すことができるのは「ドイツ語を除けば」オランダ語だけであった」と記している。

おそらくこのドイツ系入植民は、オランダ近縁から海を渡って来たのだろう。フロンティアにはそういう人々がいた。フロンティアは、ワシントンが住む海岸地帯とまったく異なる社会と言える。

最後に旅の終わりを簡単に見ておこう。

4月7日午後、雨が止み、空に虹が架かる頃、一行から離れていたフェアファックスが近くまで戻って来ているという報せが届く。早速、ワシントンは友を迎えに行く。そして、2人で入植者の小屋に泊まる。その日の日記には誇らしげに、久し振りに「初めて家の中で眠った夜になった」と記されている。

2人の若者は、自分で調理をしなければならなかったが、いつもうまくいくとは限らなかった。しかし、今は何よりも食物をおいしくするスパイスがあった。空腹である。

食料を持って来るはずの男は結局、見つからない。そこで測量団は食料を自前で調達しなければならなかった。

測量団に戻った2人は、空腹を抱えながらテントに残って物悲しい気分に入る。旅の最初の頃に感じた興奮と期待は飢えと渇きによって色褪せていくようであった。フロンティアは

もうたくさんだと2人は思う。そろそろ潮時だろう。

夕方、食料を探しに行っていた男達が戻って来て、2人はようやく胃袋を満たす。元氣を取り戻した2人は我が家に向けて出発する。

4月13日に少年の旅は終わりを告げる。

この33日間の旅は、これまで少年が経験した中でも最も有益な体験であった。旅は人成長させる。ワシントンはフロンティアをその目で実際に見て、その身で実際に感じた。フロンティアでの体験は、生涯を通じて忘れられない貴重な体験になる。

フロンティアでの不便な生活に耐えられるか、そして、測量を着実にこなす手際の良さを持っているか、それら2つが測量技師として必要な資質である。はたして少年は測量技師として十分な資質を持っていることを示せたのか。

その答えはまだ出ていないが、この測量旅行で少年の心の中に忍耐強く正確に物事を行う精神が培われたことは確かである。

そうした精神は、生涯にわたってワシントンを導き、幾多の困難を乗り越えさせた。どのような局面に対しても、どのような仕事に対しても、決してその重荷を投げ出すことなく弛まず前進する精神。それこそワシントンが持つ最も重要な資質である。

第二章 若き日のワシントン

物語の舞台



青年に成長したワシントンが兄の遺志を継ぐ。新世界の覇権をめぐってイギリスとフランスの対立が本格化する。そうした中、ワシントンは、フランス軍に最後通牒を通告する任務を受ける。青年将校は、使命を胸に抱いて、はるか北に旅立つ。

使命を果たした後、青年将校は初陣を飾る。ワシントンは総督代理の命令を受けて、一隊を率いてフロンティアに赴く。そして、イギリスとフランスの全面対決の火種となる事件を

引き起こす。

フランスがオハイオ川分岐にデュケーヌ砦を建設したのに対抗して、ワシントンは南方にネセシティ砦を建設する。そこへフランス軍が大挙して襲来する。青年将校の運命はどのよう

著者プロフィール・連絡先

氏名…西川秀和

所属先…大阪大学外国語学部

専門分野…歴代アメリカ大統領(学術博士)

著書…アメリカ歴代大統領大全シリーズ(大学教育出版)

歴史が創られた瞬間のアメリカ大統領の英語(ベレ出版)

オバマ「勝つ話術、勝てる駆け引き」(講談社)

昭和天皇の全国巡幸(アーカイブス出版)

冷戦レトリックの形成過程(早稲田大学出版部)

E-mail: nishikawa@american-presidents.info

Twitter: https://twitter.com/Poeta_Laureatus